

オーナー制度で耕作放棄地解消へ



農地復元に一役買った水本委員（左）と奥明日香入谷ファームの森本代表

水本勇一さん・奥明日香入谷ファーム

【奈良】明日香村入谷地区の代表で同村農業委員を務める水本勇一さん(69)は、「奥明日香入谷ファーム」代表の森本博文さん(67)や、地元農家と協力し、耕作放棄地の解消に取り組んでいる。山間部に位置し、日本の原風景が広がる入谷地区を後世に残すため、地区の耕作放棄地を解消しようと立ち上げたのが、「奥明日香入谷ファーム」だ。同ファームのオーナー制度は、利用者のニーズに応じて、1ヶ月から12ヶ月までさまざまな区画を利用するこ

明日香村

とができ、現在、都市住民16家族が、旬の野菜や水稲栽培を行っている。農地をあるべき姿に戻し、都市住民とともに地域を次世代まで継承することをめざす中で、40年ぶりに復活した農地もあり、原風景を楽しみながら農作業を行う山間部ならではの利活用を売りにする。

農業委員が地元農家と連携

水本委員は、日頃の農地の管理作業に加え、利用者に作付けから収穫までの指導や、栽培に必要な農機具の貸し出しも行うなど、利用者が新たな担い手となれるよう力を入れている。「これからは『奥明日香入谷ファーム』を通じて、都市住民との交流を深めながら、入谷地区を利用者とともに守っていききたい」と水本委員は話す。（木村将史）



脱サラし、タマネギ農家へ転身



【兵庫】全国屈指の農業産地・淡路島で、タマネギ、キャベツなど1・2畝の二毛作に取り組み多田信雄さん(54)。脱サラして淡路島に移住し、2023年に独立就農した。もともとは非農家で、農業に興味があり大学の農学部に進学。卒業後は大手飲料メーカーでビールの生産研究に携わっていたが、管理職になってから遠ざかったのが転機となった。農業の生産現場に未来を感じ、妻の理解もあって就農を決意。「ひょうろ」と感謝を込めて語った。（山口昭彦）

南あわじ市 多田信雄さん

「応援や手紙が大きな励みに」は、地域計画からの職務内容やコロナ禍などで「ものづくり」から遠ざかったのが転機となった。農業の生産現場に未来を感じ、妻の理解もあって就農を決意。「ひょうろ」と感謝を込めて語った。（山口昭彦）

高校生がいちじく冊子製作

「地元の特産、もっと知って」



冊子を製作した「富田林高校ビジネス探究いちじく広め隊」の3人といちじく農家の吉川幸一郎さん（左端）

大阪府立富田林高等学校

【大阪】大阪府立富田林高等学校（富田林市）が羽曳野市の特産であるいちじくの魅力や生産の現場や酒蔵の現場や酒蔵から安定生産が可能な新品種開発を求めている。冊子は羽曳野市内の全小学校に寄贈

れ、いちじくの特徴・クイズ・品種の適性診断・生産者の声・栽培スケジュール・レシピなどを盛り込み、子どもたちが楽しみながら詳しく学べる内容に仕上げた。製作にあたっては、校内アンケートや農家への聞き取りも行い、学校がある富田林市に隣接する羽曳野市の特産でありながら、その魅力や食べ方が十分に知られていない現状に着目。冊子は羽曳野市内の全小学校に寄贈

猛暑に負けない酒米新品種「湖響」

滋賀県

約10年かけ開発、収量は従来の約2倍

【滋賀】県はこのほど、暑さに強い酒米新品種「湖響」を開発した。近年、夏の猛暑の影響で酒米の収量・品質が不安定となる中、生産者や酒蔵から安定生産が可能な新品種開発を求めている。冊子は羽曳野市内の全小学校に寄贈

をイメージし、近江の地酒として多くの人の心に響き渡るようにとの思いが込められている。予定。（福井かれん）



「湖響」を発表した三日月知事（中央）知事は「作り手、醸し手、消費者が良いと思える『湖響』の用意ができたので、生産の現場や酒蔵により良いものが届けられるようにしていきたい」と語った。湖響を使った酒は、来年2〜3月ごろに地酒として販売される予定。（福井かれん）

青年委員奮闘中

▷41

八幡市 西川吉之農業委員

【京都】八幡市農業委員会の西川吉之農業委員(47)は現在5期目で、農業者年金加入推進部長として、同世代の若手農業者に農業者年金のメリットを伝える活動に力を入れている。

八幡市農業青年クラブに声をかけ、農業者年金の新規加入者を毎年着実に増やしている。農業委員会の農業振興部長に就任し、地域計画のブラッシュアップに向けた地区連絡会議や、農地の見回り、JAなどで出会う農業者との意見交換など、農地利用最適化活動にも率先して取り組んでいる。



農業者年金の加入推進をリード

農業青年クラブの役員としても活躍

中心はタケノコ。市街地に近い都市近郊の立地を活かして、自分が住んでいる美濃山地区で収穫したタケノコのブランド化をめざしている。（会沢仁史）

泥遊びで「田んぼダム」PR

日高 地域インフラを次世代へ伝える

【和歌山】日高地方を拠点にサッカー教室を開く（一社）S.I.S（坂本寿里也代表）は5月6日、日高町荊木地区の水田で「泥んこスタジアム2026」を開催した。



当日は地元少年サッカークラブの児童や保護者ら約100人が参加。田の泥にまみれて遊ぶことを通じて、田んぼが持つ治水機能を学んだ。これは、行政や住民が協働して浸水被害軽減をめざす「西川流域治水プロジェクト」の一環。遊びを通じ、次世代に農地が町を守る「インフラ」であることを伝える体験型学習がねらい。排水溝に調整板を設置すると20㍍の田が100㍍の雨水を溜める「ダム」

になる仕組みを、県担当者がフリップで解説した。イベントに協力した岸井広木農業委員会事務局長は「実体験を通じ、農地の持つ多面的機能への理解を深めてもらい、地域全体の防災意識の醸成につなげたい」と語った。（日高町農業委員会）

近畿

畿

近畿総局

和歌山市茶屋ノ丁2番1
和歌山県農業会館6階
073-432-6114

滋賀県支局
077-523-2439

京都府支局
075-441-3660

大阪府支局
06-6941-2701

兵庫県支局
078-391-1221

奈良県支局
074-222-1101